

---

# 恋する爆弾王女

砂那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する爆弾王女

### 【Nコード】

N4829M

### 【作者名】

砂那

### 【あらすじ】

突然王宮に拉致され、訳のわからないままに姫の夫にさせられそんな主人公。ギャル口調の王、世界王者のようなパンチを持つ王妃。そして巨大な魔力を暴発させる姫に、メイド服にアフロの美少女まで現れて？

「いいから事情を説明しろ、事情を！」

国を追われた最強魔導師の、受難の旅が始まる…。

## 第1話 災難の始まり

その森はまるで長い間、人が足を踏み入れた事がないような状態になっていた。木々が生い茂り、草は生え放題。森の中とはいえ、日中も薄暗い。

「なんだこの森は。なんでこんなに荒れてんだ。いばら姫でもいるのか？」

見事な装飾の剣を、まるで芝刈り鎌のように振り回したひとりの青年が、身の丈程にも生えた草を薙ぎ払いながら進んでいく。

黒髪に、赤い瞳をしている。

魔術師のように身軽な服装をしているが、剣を持っている所を見ると剣士になのだろうか。

「てか、ここ、地図によると道なんだけどな。森じゃなくて。地図が少し古かったか？ 半額の更にセールで二割引だったからな……」  
身形は良いが、口と態度は悪そうな青年は、地図を放り出してその場に座り込んだ。

草の匂いが広がる。

「メンドクサイな……。もう帰るか。って帰る場所はもうないんだっただな。ってかさつきから俺、独り言多すぎ？」

文句を言いながら座り込んだまま、剣を使って周囲の草を薙ぎ払う。無造作に片手で剣を振り回しながら、放り投げた地図を広げる。

「川から北に森を抜けて、街道を行けばいい筈なんだけどな。何処から間違っただら。それとも何か。実はもう国は滅んで、魔物がいたりしてな。それを倒すのが使命とかだったりして。あーもー、何もかも面倒だ。なんで俺がこんな事しなきゃなんないんだ？ ってさつきからうるせえよっ！」

耳元で何か動物の威嚇する声。

草を払っていた剣をそのまま声がした方向に薙ぎ払うと、何かに当たった感触がした。

「ん？何だ？……うさぎ？」

足元に少し巨大化したうさぎが転がっていた。

「これが魔物……な訳ないな。食えるんかな、コレ」

座ったまま剣で突付く。

と、その時。

「「「おめでとおおおおおございますうつうつうつ」「」「」

茂みの中からすばばばと複数の人の姿が現れた！

「う、うわ何だ？ おめえら何処から現れた？ ってか、何なんだ？」

慌てて立ち上がろうとするが、男達はずんずんと迫ってくる。

「おめでとうございます。おめでとうございます。あなたこそ……救世主です！」

「これでこの国は救われる！ 森にも入れるし町も破壊されない。感激です。感謝です」

「この国の勇者を今すぐ王宮へ連行……。じゃなかったお連れしろ

！ 王都に連絡を」

「ラジャッ」

「でさ」

気が付けば、そこは半壊した建物の中。どうやら王宮らしい。満面の笑みを浮かべた王と、感激した様子の王妃の目の前で。強引に連れてこられた青年は溜息交じりに呟く。

「誰かまともな人間はいないのかっ。事情を説明しろ、事情をっ！ おめでとうとか勇者とか口走らないヤツ希望」

「おめでとう」

「だからおめでとうはもういつつの。誕生日？ 俺今日誕生日なのか？ それとも新年か？ あけましておめでとうってことなのか？」

「キミ、いまは夏だよ？ 新年はまだ半年も先だ」

「そんなとこだけ冷静に突っ込むな！ 気の毒そうに言っな！ ……」

「ああ、もう疲れる。何なんだ、この国は……」

王が、はっとしたように立ち上がった。

「だよ。疲れてるよね。すぐに部屋を用意しよう！ パーティとか結婚式の日取りはまた明日」

「は？ 結婚式？ 何の話を……って、人の話少しは聞こうよ……」

気が付けば部屋に押し込められ、扉が施錠された。

「ん？ 施錠って何だよ。おかしくないか？ 施錠されたじゃねえよ、詳しい話もつと聞かせろよ。そもそも俺の名前だってまだ出てきてないぞ。名無しのままこんな仕打ちはねえだろう」

散々騒いでも、扉の向こうからは何の反応もない。

仕方なく、ベッドの上に座る。

「……俺はこんな所で足止めされる訳にはいかないんだけどな」

ふと、視線を部屋の中に巡らせる。その隅に無造作に置かれていた張り紙。そこに書かれていたのは。

『森に奥地に住み着く凶暴なグリオンを倒した勇者を、姫の夫として迎えよう』

「……まさか、あの凶暴なうさぎがグリオンだったりするとか。そんな事ないよな？ そんな事ないよな？ 二回言っちゃった」

青年の声だけが空しく部屋に響き渡る。

## 第2話 アフロの美少女、現る

王宮は無残にも崩れ落ちていたが、この部屋だけは頑丈そうな造りだった。

「そついえばこの王宮。なんであんなに崩壊してたんだ？ 一晚寝て起きたら廃墟の中でいたる所に白骨が……なんてオチだったりしてな」

周囲を見渡すが、変わった様子は見えなかった。一応王宮で、豪華な造りの部屋である。他にアイテムも、ヒント機能もないようだ。

「……翌朝じゃないとイベントが発動しないって場合もあるしな。それにこんな訳わからん状況よりは廃墟で白骨の方がまだマシだ。

……寝よう」

うん、そうしよう、それがいいと呟きながら。

俗に言う現実逃避というものである。彼は綺麗に整えられた寝台へと入り眼を閉じた。

（翌朝になればきっと体力気力共にマックスで、ついでに毒麻痺からも回復する。……多分）

その、翌朝。

ばっぐーーーーん！

突然、王宮中に鳴り響くのは、爆発音。

「な、な、なんだ？」

寝台から飛び起きる。振動が建物全体を揺るがしていた。青年は頭を軽く振って立ち上がろうとするが、続く振動の為にそれは困難だった。

「なんだ、夢じゃなかったのか。じゃなくて。急にイベント勃発か？ フラグ立つちゃったのか？」

そう言い続ける間にも、爆発音は続く。これは只事ではないのだろう。彼はようやく真顔になると、瞳を閉じた。ふわり、と黒髪が風もないのに靡き、赤い瞳が光る。

「魔力……かなり大きい魔力だな。やっぱり魔物か？ メンドクサイなあ。まあ、でも」

笑みを浮かべる。

それは、自分の力に自信を持つ者しか浮かべる事の出来ない笑みだった。

「俺の相手じゃないな。力任せに魔力を放つだけが魔法じゃないぜ？

……って！ 扉開かねえぞ、おい。まだ施錠したままかよ。こんだけ言つといて部屋から出れないのかよっ」

そうしている間にも爆発音は続いている。

「あー、もう。仕方ねえな……」

どうせ破壊されているんだ、今更扉のひとつくらい、今まで受けた理不尽な仕打ちを考えると安いくらいだろう。そう勝手な判断をして、扉の前に腕を突き出す。

「扉の前に誰かいたら避けるよ、危ないぞー」

一応声をかけておいて。瞳を軽く閉じる。

鋭い魔力が刃のように放たれ、扉だけを完全に破壊した。

粉碎された扉は破片となって飛び散る事もなく、砂のように崩れ落ちる。その扉の奥には。

涙を浮かべ、感激した様子の黒髪のメイド服の美少女。（但し、アフロ）

「え、美少女？ 泣いてる？ 何で？ いや、メイド服萌え。でもそれにアフロはどうだろう？ じゃなくて、何処に驚けばいいんだ

俺は」

「テレーゼは感激致しました。これ程見事に魔法を使いこなす方が姫様の夫になろうとは。感激です。感動です。全米が泣きます」

「い、いや、姫様の夫ってゆーか。てか全米って何処よ。ああもう訳わかんねえ！」

「それはともかく謎の勇者様。朝食の準備が出来ました。どうぞいらっしゃって下さい」

次の日になっても事態はやっぱり変わらなかった。

ここはしっかりと話を聞いて、誤解も解いて、速やかにこの場を後にするしかないだろう。

彼はようやく覚悟を決める。

「てかさ、朝食は有難いんだけど、アレ、いいのか。爆発しまくっちゃってるんだけど」

アフロの美少女も城の住人も、轟く爆発音に皆慣れきった様子で足を止める者すらいない。

ある意味脅威だった。アフロの美少女テレーゼは少し不思議そうな顔をして首を傾げて。

「朝食は和、洋、中華のどれがよろしいでしょうか？」

「ああ、朝は和食が……って違うだろ。なんか違うだろ世界観っての考えろよっ。それにまず俺の質問に答えろよ。ああ、話の通じる人間と出会いたい……」

がつくりと肩を下ろして、しかし空腹の欲求には勝てず、しずしずと歩くアフロの美少女の後について歩く。すると、中庭付近にひとりの人影が見えた。

（ん……あれは？）

朝の光に煌く金の髪を靡かせている、高貴な身分の少女。白いドレスよりも白い肌に、宝玉のような蒼い瞳。

まるで絵画から抜け出たかのような存在感。

ふと、その様子に見惚れたが。

「待て待て待て待てーッ」



不意に優雅な仕種で立ち上がったその少女が、小首を傾げたまま白い指先で空中に丸い円を描くのを見て、走り寄る。

「あら？」

待て、と言われて振り向いた少女が指先を彼に向ける。

その指先からは魔力が放たれていた。

青年は咄嗟に防御の魔法を張る。

弾き返すのは危険、と咄嗟に判断した為だ。

それくらい、その少女が無造作に作り出した魔力は強かった。

### 第3話 王妃よ、世界を目指せ

「つてえ……。何て魔力だ、危ないだろ、あんな所でッ」

怒鳴られた少女は不思議そうに首を傾げている。

「もしかして朝からの爆発もあんたか？室内で魔法使っちゃいけないって先生に教わらなかったのか？」

「あの、失礼ですが貴方は……？」

金髪の美少女は、静かな声でそう尋ねて来た。

「うわー、やってる事は非常識極まりないのに、初めてちゃんと聞かれたよ。ここまできてようやく。そうだよな、初対面の人には名乗るのが礼儀だよな。…俺はロドウィンって言う旅の者。なんか知らないけど、いつの間にかこの城に連れてこられてた」

「ロドウィン様。わたくしはセレニティと申します。父のお客様でしたか。それは失礼を致しました」

優雅にお辞儀をするその様子は、先程の恐ろしい魔力さえ忘れそうになる程だった。思わず挨拶を返してその場を立ち去りそうになる。

「いやいやいやいや、違うだろ。えーと……」

振り向くと、またアフロの美少女が感激した様子で涙を流している。そうか、この魔力を暴発している少女の傍にいるからアフロなのか。

そして、またこのパターンか……。

「ひ、姫様つつ。テレーズは、テレーズは感激致しました。姫様の魔力をあれ程簡単に！」

「姫様？ この魔力暴発の美少女がか？ そういやさっき、父のお客様って」

「はい、こちらはセレニティ姫でございます。ロドウィン様」

そう言えば王妃に少し似ている気がした。

「んじゃ、こんな風に王宮を破壊しまくったのもこの姫か。あんた、

何でこんな事してんだ？」

「わたくし、王宮を破壊しているわけではありません。魔法の練習をしているのです」

「魔法の練習？ そりゃ魔力は凄いいたいだが、まずは制御を覚えるのが先だろ。あんたの先生は？」

「先生……？ 何のことでしょうか。わたくしに先生などおりません」

深い溜息をついて、ロドウィンは中庭に座り込んだ。

「つまり、誰からも教わらずに魔力を放つ方法を覚えて、練習してらって事？」

「はい、そうですわ」

「そうか。あー、そのアフロの美少女さん。悪いけどさ、王様に会わせてくれないかなあ？」

「聞きたいんだけどさ、なんとなく事情は察せられたからちゃんと答えて欲しいんだけど」

テレーズに連れられて、王の間へと移動する。

ロドウィンがそう切り出すと、王と王妃は顔を見合わせて、それから頷いた。

その傍らにはセレニティ姫もいる。

「要するに、姫の魔法暴発が迷惑なんだろ？ 毎日あんな風に魔力を暴発されてたら、国民だって迷惑な筈だ。だったら何でそう言わない？ 止めさせればいいだろう？ 一国の姫を見ず知らずの他人にやるつもりなのか？」

昨日の様子から言って、また曖昧に聞いてもはぐらかされるだけ。そう思ったロドウィンはきつぱりとずっぱりと言い放つ。

けれど王と王妃の沈んだ表情と、セレニティの涙を溜めた瞳を見て。

「あ……？　そこでそういう反応？　俺悪者なの？」

「……姫も我々も、充分わかってる。わかっていても止められない訳が、あるのだ……」

「訳が、あるのだ……じゃないでしょうが！　元はと言えば、あなたがつつ」

悲しげに俯いていた王妃が、突然立ち上がり王の頭を殴り倒した。見事なパンチだった。

思わず共に世界を目指したくなるような。

「祖先に言霊術士がいたとか散々言っていたくせにッ。無意識にしか使えないくせによりによって自分の娘に言霊呪縛を！」

「なるほど。言霊呪縛か。呪縛を掛けられたものは、本人が望まなくてもそれを成就させようとするからな。で、その姫の夫云々は？　まさか祖先に夢占い師までいたんじゃないだろうな？」

「え、えへ」

「えへ、じゃねえだろ！　中年男が許される言葉じゃねえぞそれは！　しかし、その姫の巨大な魔力に加えて言霊呪縛だろ？　厄介だ。まだここから脱出しよう！　でのが指令の脱出ゲームのがマシだったかもな」

ロドウィンは苛ただしげに黒髪を掻き上げる。

「んで、どうするんだ。魔力の制御は独学では無理だ。ちゃんとした先生について習った方がいい。言霊呪縛は成就するか、掛けた相手が死ぬかしないと解除出来ないぞ」

王妃の瞳が怪しくきらりと光ったのを、王もロドウィンも見逃さなかった。いざとなったらやる気だ。いや、殺る気だッ。お、女つてこええー……。

「グリオンを倒した勇者が、姫を救ってくれるって言ってたもん」

「言ってたもん、じゃねえよッ。中年男に許される言葉じゃねえって言っただろう？　あんなうさぎ、誰でも倒せるっての！　それにあんたら、俺が誰か知ってて言ってるのか？」

「知らない」

「知りません」

「あの、知らないです」

「そんな所だけ仲良く即答かよ。こんなに苦労してんのに、俺まだ謎の青年のままだったんだな……」

ロドウィンは遠い瞳をして窓の外を見る。のどかな美しい森が広がっていた。ああ、緑って人の心を癒してくれるよなあ……。

## 第4話 世の中そんなに甘くはない

現実逃避は良くないよ、キミ。それに今名乗らないと、謎の青年のまま終わるぞお？」

「ぞお？　じゃねーっつーのっ。ああ、今誰よりもこの男がムカツク……。でも謎の青年のまま終わるのもな……。てか名前出てるんなら謎じゃなくね？　でも出自、目的が不明ならやつぱり謎か？」

「もういいから名乗っちゃいなよー」

「うるせえよ、この中年男。ああ、もういいや。謎の青年でいいです。とにかく姫にちゃんとした魔法の先生つけてやりな。制御を覚えて魔法を使いこなせるようになればいいんだろ、要するに。そして姫も破壊魔にならなくていいし、王も暗殺の危険（もちろん王妃からの）に怯えなくていいし、アフロにメイド服なんて不思議な格好も見なくてすむ。うん、解決。んで俺は目的地へと向かって颯爽と去っていく。完。んじゃ俺はこれで。さようなら」

「待ってえー」

立ち去ろうとしたロドウィンに、がしつと掴みかかるのは例の中年男。じゃなかった、王。

「語尾を延ばすのはやめろっ。てかせめて王妃か姫だろ！　なんで男に縋られなきゃなんないんだよ」

「だつて夢が……。夢で、姫を救ってくれるのはグリオン倒した勇者だつて言つてたもん」

「そんなただの夢だろ！　もつと現実的な解決方法があるのに何で夢を優先するんだよ！　魔法の先生を呼べは解決じゃねえかよ！

「

『姫はグリオンの勇者に救ってもらう！』

王の声が急にエコーが掛かったかのように、部屋中に響き渡る。王妃は拳を握り締め、王は青ざめ……。そしてロドウィンは脱力した。「信じられんねえ……。またやりやがった……」

王妃の見事な昇竜拳を見上げながら、両腕に美少女（但し、ひとりはアフロ）に縋りつかれ、溜息をつくしかない。

「えーと、言霊呪縛を解除するには本人殺すしかねえんだよね？」

……王妃さん、それで K？」

「この際仕方ありません。国の為です」

「く、く、国の為だなんてひどいっ。ひどいよお」

「いい大人が泣くなみっともない……」

深く深く溜息を付く。厄介だ。本当に心の底から厄介だ。

「あのさ、俺、目的があるのよ。だからいつまでもこの国に居る訳にはいかないんだけど」

「目的とは何ですか？ ロドウィン様」

腕に張り付いていたセレニティ姫が尋ねる。

「まあ、こんな所まで話を引張ってくるつもりはなかったんだけど。俺はロドウィン・アルインダと言う。ここから更に西にある海沿いの国の出身だ」

「アルインダ国の……王家の者だと？ み、見えねえ……」

「あんたに言われたくないわッ。まあ、中年男に仔細を語りたくないから言わないが、先を急ぐんだ。知り合いの魔法師くらい紹介するからそれで勘弁してくれ。って、なんで俺が頼まなきゃなんないんだ？ むしろ被害者だよな？」

きゅっと、抱きつかれた腕に力が込められたのがわかった。見ると、セレニティ姫が至近距離で見つめている。

「どちらまで、行かれるのですか……？」

「東の果てだよ。遥かに遠い。……俺は行かなきゃならないんだ」

「どうして、そんな遠くへひとりで？」

「急に真面目にそんな事聞かれても困るが。えーと、聞いても楽しい話じゃないんだが」

セレニティは立ち上がる。そして王座にいた王と王妃を別室へと追いやると、テレーズが照明を変えて、花を撒き散らした。

「これで Kですわ、ロドウィン様」

「いや、そうあからさまに雰囲気出されても困るんだが」

「…音楽、入れます？」

「入れんでいいわっつ」

さあお話を聞かせて下さいと言わんばかりの様子で両脇に座った二人の美少女の姿に、今日何度目かわからない溜息を付く。

「話さないと解放してくれそうにないな。時間がないから簡潔に言うが、俺の国では王家に男子が三人生まれた場合、絶対に守らなくてはならないという伝統があつてだな。それが、王位は必ず長男が継ぎ、次男は神官になり、三男は国を追放するっていう内容で。男子が三人もいると王位継承を争って国が乱れるからって事らしい。んで、俺はその三男って訳。俺は王位を継いだ兄の命令で、東の果てにある魔導天の塔へ行かなきゃならないんだ」

「そこでどうするんです？」

「さあな。まあ大人しくしていれば普通の生活くらいは出来るだろうし、魔法でも学びながら暮らすかな」

「魔法……！」

急にキラキラと瞳を輝かせるセレニティ姫。

「うわ、何か嫌な予感が……」

「わたくしも参ります！」

嫌な予感っていうのは大抵当たるのは何故だろう。これからこの姫を説得する労力を考えて、ロドウィンは肩を落とす。そして、この一言で納得してくれないかな、と僅かな、ほんの僅かな望みを掛けて。

「却下」

「まあ、どうしてでしょう？」

やっぱり世の中はそんなに甘くない。



## 第5話 諦めが肝心だ

「あんだ、この国の姫だろう。そんなに簡単に国を出ていいのか。見た所他に兄弟もない様子だし、跡継ぎなんだろう？」

「確かにわたくしはこの国の王位継承者ですが、父も母も反対しないと思います。むしろわたくしが魔法制御を覚えて帰国した方が国の為かと思います」

「た、確かに……。って、俺が納得させられてどうする。とにかく却下」

もう話は終わり。

そう言うかのように立ち上がり、ロドウィンは振り向いた。

「まあ、そういう事で。先を急ぐし俺は行くよ」

「駄目です」

「いや、駄目って言われてもな……。却下で」

「駄目です」

「却下……。ってこれじゃどうしようもねえな。仕方ない、何が駄目

で何が却下か冷静に話し合おう」

「わかりました。テレーズ、お茶をお願い」

「かしこまりました」

アフロの美少女は完璧なお辞儀をして立ち去っていった。ロドウ

インは再び溜息を付く。

（溜息を付くと幸せって逃げるんだっけ……）

ぼんやりとそんな事を考えながら。だとしたら、今日一日で快速どころか特急の勢いで幸せとやはら遠ざかっているのだろう。

「で、まず俺の言い分な。お姫様なあんだに旅なんて無理だし、他国の世継ぎの姫を危険に晒すのもマズイだろ。以上」

「大丈夫です。旅の経験はないですが、出来ます」

「……なんで俺？ 魔法教えられるヤツなんていくらでもいるし、しかもあんだは姫だし、喜んで教えてくれるヤツなんて山程いるぞ

？」

「仕方ないです。そういう風に決まっしまいましたから」

「く……。これが言霊呪縛か。何が何でも俺を関わらせるつもりか」  
「……わたくしの魔法を止めて下さいました」

不意に、セレニティが小さく微笑んだ。それは儚く、そして少し悲しげで。

「わたくしにもわかっていました。わたくしの存在そのものが、迷惑になっていく。でも、わかっていても止められなかったのです。それを、ロドウィン様は止めて下さった。これ以上の理由を、わたくしは知りません」

「あんたのせいじゃないよ。他の者が何言ったって、言霊呪縛ってのはそういうモンなんだ」

いつのまにか、テレーズがお茶を持って立っていた。

完璧なメイド服のアフロの美少女は、静かにお茶を淹れながら。

「どうか、姫様を連れて行って下さらないでしょうか……。私で出来る事ならば何でもお手伝い致します。今までも居たのです。姫様に魔法を教えて下さるうとする方や、王様の言霊呪縛を解こうとして下さった方が。……けれど、姫様の魔力を止める事は出来ませんでした」

「なるほど。確かにあの魔力は凄かったな。制御を覚えれば、稀有な魔導師になれるかもしれない。それに、これも呪縛された結果だろうし、せめて呪縛を解除出来る人間の所まで連れて行くってのは仕方ないかもしれないな……」

テレーズの淹れてくれたお茶を一口飲んで覚悟を決める。

「よし、仕方ない。取り敢えず呪縛解除出来る人間を探す。悪いが、俺も急いでいる。なるべく早く出発出来ると有難い」

「ならば今すぐにでも出立いたしましょう」

仮にも一国の姫である。準備には随分と時間がかかるであろうと思っていたロドウィンは、予想外の返事に素直に驚く。

「いいのか？ 準備とか色々あるんじゃないのか？」

「わたくし……ずっと、王宮を出る事を夢見ていたのです。やっと外へ出れるのです」

言霊の呪縛に縛られていた姫は。

その言葉通り夢見がちな瞳でそう告げる。

けれど、自分についていきたいと切望するのは、別の呪縛にまた囚われているだけではないのだろうか。言霊に翻弄されている哀れな王女。国を出なければならなかった自分と、国を出たいと切望する王女との旅は、果たして幸運となるのか不運と終わるのか。

「足が痛いです……」

王と王妃に見送られ。人目を避けるように出立してから、五分。そう、まだ五分。

「あまりにもお約束な反応に何も言う気がなくなるな……。よし、先を急ごう」

「ロドウィン様はどうしてそんなに急がれるのですか？」

アフロのメイド服の美少女が、（旅をするのにまだメイド服ってのはどうだろう？）姫の荷物を大量に担いだまま言う。

「そうですね。せっかくお城から出れたのですから、もつとまったりと、観光名所など巡りながら行かれたらよろしいのでは」

「悪いが、そんな余裕はないんだ。こっちにも事情があつてね。とにかく荷物は俺が持つから急ぐぞ」

テレーズから荷物を奪い取り、歩き出す。さすがに女に大量の荷物を持たせたまま身軽では歩けない。しかし傍目にはどう見てもお嬢様、侍女、下男だ。

「いや、下男つてのはいくらなんでも自分を卑下しすぎだろ。せめてボディガード。そう、俺はボディガードだ」

そう胸を張るが、その腕は大量の荷物の重みで震えている。

「ロドウィン様、私がお持ちしましょうか？」

「はっはっはっ。何だこれくらい。全然平気だ」

キメ顔でそう言ってみるが、ロドウィンは魔導師だった。当然身体など男の嗜み程度しか鍛えていない。

「取り敢えず急ぐぞ。このままだと森の中で夜になっちまう。野宿は危険だし、さっさと町へ辿り着かないとな」

セレニティ姫はさすがに多少は動きやすい服装をしているが、町娘のように身軽な服装でもない。しずしずと歩く姫の歩調に合わせていると、夜どころか明日の朝になっても町にはたどり着けないような気がした。

「……無理だろーな」

しばらく歩いた後。

地図を広げ、現在地と町までの距離を測ったロドウィンは、早々に夜までに町に辿り着くのを諦めた。人間、諦めが肝心だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4829m/>

---

恋する爆弾王女

2011年1月22日11時11分発行